

介護を受けるということ①

皆さまが、心身ともにまだ健康な時期にあるのなら、今後、歳を取って身体が衰えてきたときには、介護保険を申請して、訪問介護のヘルパーさんに介護をしてもらうのだと漠然と考えているかもしれません。いや、きっと、そういう制度があるということを知っているだけで、健康な時期に、自分自身が介護を受けるという具体的なイメージをしている人は、少数派なのかもしれません。



なぜ冒頭からこんな話をするのかと言えば、実際に生活に支障を来しており、介護保険を使って介護を受ければある程度解決する道が見えているにも関わらず、介護保険の認定申請をすることを断固拒否して周囲が困っているという事例を、ここのところ何件も立て続けに聞いているからです。

とある80歳代の夫婦は、夫が判断力はしっかりしていますが、人工透析に加えて癌治療と身体が悲鳴を上げている状態、妻は足腰が弱ってきている上に、認知症の症状が現れてきている状態。元気なときの妻は明るく行動的で、買い物も料理も掃除もお手のもの、常に動いていないと気が済まないような気質だったそうですが、数年前にくも膜下出血を患って以降は、動くことがかなり億劫になってしまったようで、料理や掃除など家の中の家事がまともに出来なくなってしまっているのだとか。

冷蔵庫の中には賞味期限切れの腐ったものばかり入っているし、お茶碗もきれいに洗われておらず茶渋で汚れているものばかり。夫は自分自身の身体の状態が思わしくない状況で、妻が出してくれる食べ物に対して、食欲が湧かなくなってしまい、栄養状態も悪くなってしまいう始末。

こんなときこそ、介護保険の認定申請をして、介護ヘルパーに定期的に入ってもらえば、掃除を手伝ってもらったり、調理を手伝ってもらうだけでも、この夫婦のQOL（生活の質）はかなり改善することは間違いないでしょう。

しかし、遠方に住む2人の子供たちが介護保険認定申請の手配をしようとしたところ、この夫婦は逆上してしまったそうです。

夫は「勝手に決めるな。少しはお母さんの気持ちも考えろ。他人の世話になるなんて、お母さんを傷つけるようなことをするな！」と。妻の方は、子供たちが連絡した地域包括支援センターの職員が自宅を訪ねていったところ、名乗った途端に「結構です、必要ありません。」とインターホン越しに門前払いで、会うことすらしなかったそう。

介護保険の認定申請すら拒否されてしまうと、介護の専門家に介入してもらうことが出来ません。かといって、遠方の子供たちが介護離職をして、両親の面倒を見るべきなのでしょうか。